

平成14年度研究課題の外部評価結果報告

○ 目的

衛生研究所が実施する研究課題に対して、研究計画の適正な評価を行うことにより、課題の設定、計画の立案と実施方法、成果の活用等について、よりよい方策を見いだすとともに、評価結果を公表することにより衛生研究所の研究活動について広く県民の理解を得ることを目的として、外部評価委員による評価を実施しました。

○ 外部評価委員

委員 中込 和哉 帝京大学薬学部教授（専門分野 分析化学等）

委員 野上 貞雄 日本大学生物資源科学部教授（専門分野 感染症等）

○ 評価対象

平成15年度研究課題のうち、経常研究15課題について外部評価委員による評価を実施しました。

○ 評価項目

1. 研究目的と目標
2. 研究計画の妥当性
3. 研究の必要性
4. 行政課題との関連性
5. 研究成果の行政への反映、応用
6. 総合評価

○ 評価結果及び衛生研究所としての対応

全般的には、おおむね適切な研究計画であるとの評価でしたが、一部の課題について以下のような指摘事項が示されましたので、所としての対応策を講じました。

主な指摘事項	衛生研究所の対応
①研究課題の社会的背景に関して、説明がやや不足している課題があった。	①社会的背景を十分に認識し、効果的な研究の推進に努めます。
②行政との連携、他の研究機関との連携が不明な課題があった。	②今後の研究実績、進捗状況を考慮しながら行政及び他の研究機関との連携を進める予定です。
③研究計画の具体性が乏しい課題があった。	③所研究課題評価委員会での審査をより厳しくし、具体的な計画を検討していきます。
④前年度の成果を踏まえた計画策定が必要な課題があった。	④前年度の成果を踏まえて計画全体を見直し、効率的な研究計画を検討していきます。
⑤研究計画の効率化を再点検し、期間短縮を検討する必要がある課題があった。	⑤計画全体を再点検して、研究期間の短縮に努力します。

○ 平成15年度研究課題（経常研究）

No.	グループ名	研究課題名（概要）	区分	研究年度
1	呼吸器系細菌	<p>結核菌の迅速検出法と感染源追跡に関する基礎的検討</p> <p>（2000年に発行された新結核菌検査指針には集菌蛍光染色法、迅速液体培養法及び遺伝子診断法などの新しい検査法が記載されている。そこで、これらの検査法の改良を含めた検討を行い、当所の結核菌検査体制への導入を図るとともに、感染源追跡などの疫学調査に必要な遺伝子解析法（RFLP法など）の検討を行う。）</p>	新規	15～16
2	呼吸器系細菌	<p>レジオネラ属菌に対する迅速検出法及び増菌培養法の検討</p> <p>（レジオネラ属菌の培養法の検出限界は10CFU/100mlであり、結果が出るまでに2週間近くかかる。そこで、迅速検出法の検討及びレジオネラ属菌の検出感度を高める検査法を開発するとともに、身近な都市施設の循環水・滞留水等について培養法との比較を行うことにより、開発した検査法の実用性の検討を行う。）</p>	新規	15～18
3	腸管系細菌	<p>腸管病原菌に環境のおよぼす影響に関する研究</p> <p>（一般的な腸管病原菌の検出法は既に確立されているが、病原菌が存在する環境によってはダメージを受け検出されにくい状態になることが知られている。そこで、実際の事例発生の際に効率的な検査が行うことができるよう、腸管病原菌が環境から受ける影響を明らかにし、損傷菌の検査法についての検討を行う。）</p>	継続	13～15
4	腸管系細菌	<p>食品におけるカビの発育制御に関する研究</p> <p>（県民から持ち込まれる苦情食品のうち、カビに関するものは少なくない。そこで、住居室内及び野外空気中の優先カビの調査結果を基に、食品によりどんなカビがどのような割合で分離されたのかを調査する。また、分離されたカビを用いて、温度、湿度、基質などの条件を変えての発育実験を行いカビの制御を検討する。）</p>	継続	14～16
5	食品細菌系	<p>食品中の損傷リステリアの検出及び生態に関する研究</p> <p>（リステリア食中毒の原因食品は、多岐にわたっているが、加工食品等では損傷しているため、有効な菌検出が行なわれにくい。そこで、菌数が少なく損傷しているリステリアを効果的に増菌・回復させる手法について検討するとともに、これを踏まえ競合菌が存在する環境下から損傷リステリアを効果的に検出する方法について検討する。）</p>	継続	14～16

6	エイズインフルエンザウイルス	インフルエンザ様およびかぜ様疾患患者からの病原体検出法に関する研究 (インフルエンザ様疾患と診断された患者検体からかぜ様疾患の原因となるアデノウイルスやエンテロウイルスなどが検出されることがあり、臨床診断と一致しない症例、すなわち臨床症状で区別するのが困難なケースが認められる。そこで、このような患者検体から、効率良くウイルス検索する方法についての検討を行い、迅速で正確な病原ウイルスの検出法を検討する。)	継続	14~16
7	リケッチア下痢症ウイルス	食中毒患者からの原因ウイルスの解明 (食中毒を起こす原因ウイルスは多種あるが、現在はノロウイルスについて遺伝子検査が行われているだけである。そこで食中毒原因ウイルスを広く検索するとともに、食中毒を起こす原因となった食材を探し、感染経路を解明する。)	継続	14~16
8	環境生物	生活排水消毒処理水の毒性評価に関する研究 (オゾンあるいは紫外線を用いて、生活排水を適正条件下で消毒処理することによって大腸菌群数を高率で低減できた。そこで、それらの消毒処理水の安全性を検討するため変異原性試験や細胞増殖阻害試験などの毒性試験を行い、従来法である塩素処理法と比較検討する。)	継続	14~16
9	食品汚染物質	農産物中の抗生物質の分析法の開発及び残留調査 (農薬として使用される抗生物質試験法の開発とその実態調査を行い、その使用及び作物残留の実態を明らかにする。)	新規	15~17
10	食品汚染物質	農産物中のイミダゾリノン系農薬の残留調査 (イミダゾリノン系農薬耐性穀類が将来的に輸入される可能性が高いため、穀類中のイミダゾリノン系農薬の分析法を開発検討し、輸入穀類のイミダゾリノン系農薬の残留実態を把握する。)	新規	15~17
11	食品成分	栄養機能食品のビタミン類の分析法の検討 (栄養機能食品は、栄養成分の含有量が基準以内であれば、厚生労働省の許可なしに自由に成分の機能を表示できる。制度化により、新しい食品が続々と開発されているが、栄養成分の過剰摂取による健康被害も懸念される。そこで、流通する栄養機能食品の実態調査に用いるため、既存の試験法の問題点を発見し、改良法を検討する。)	継続	14~16

12	薬事毒性	興奮系脱法ドラッグとアルコールの併用による生体に及ぼす影響 (覚せい剤や麻薬に類似したデザイナーズドラッグなどの脱法ドラッグがインターネットの普及により国内外で流通している。しかし、その品質・状況や生体障害作用などが不明なことから、その成分や毒性薬理的な調査を行う。)	継続	13~17
13	薬事毒性	マウス小核試験を用いたN-ニトロソフェンフルラミンの変異原性の検討 (中国製ダイエット食品中に含有されていた未承認医薬品成分のN-ニトロソフェンフルラミンにより、急性肝炎等の健康被害が全国的に発生し問題になっている。そこで、N-ニトロソフェンフルラミンを合成及び精製し、脊椎動物を用いた変異原性試験としてマウス小核試験を行い、N-ニトロソフェンフルラミンの変異原性の検討を行う。)	新規	15
14	生活化学	防蟻剤による室内空気汚染に関する研究 (シロアリの発生を防止するために木材や床下の土壌に散布されている防蟻剤には農薬等が用いられており、化学物質がアレルギーの一因とも考えられていることから、防蟻剤による人への健康影響が問題になっている。そこで、防蟻剤13種類について、その捕集方法、分析法を検討し、一斉分析法を確立する。その後、実際に防蟻剤を木片に塗布し、モデル実験を行い、各種条件下での揮散量を求める。最終的には実態調査を行う。)	新規	15~16
15	放射能	食材から摂取する微量元素濃度に関する研究 (放射性核種による内部被曝経路の一つは食品摂取であり、食品中の無機元素との関連が深い。そこで、県内在住者が日常食もしくは食事を介して摂取するセシウム他種々の無機元素量について調べる。さらにキノコによる放射性セシウムの濃縮機構を解明するために、野生キノコが生息している土壌中に生息する微生物がキノコのセシウム濃縮にどのように関与しているのかを調べる。)	継続	14~17